

自然遊学館 だより

2000春号 (No. 19)

2000. 5. 22

シリーズ『貝塚の昆虫 (13)』

市民の森でキョウチクトウスズメ発生

キョウチクトウスズメといっても小鳥のスズメではない。元来日本には住みつけない南方系のスズメガの一種のことである。このガは東南アジアからインド、アフリカなど熱帯地方に広く分布していて、わが国からは偶産蛾として沖縄本島や南西諸島から記録され、ときには継続的な発生もみられるが、寒さに弱く定着はむずかしいようである。近年本種の日本進出が著しく、一昨年の1998年には和歌山県の御坊市で成虫が（乾風、1998）、和歌山市および海南市でさなぎが採集されている（村瀬、1998）。ところが昨年（1999）には今まで記録のなかった大阪府下の各地（大阪府大槻内、浜寺公園、長居公園、高槻市南部など）でキョウチクトウから幼虫が多数見つかった（金沢・松本、2000）。西側が海になり開けている、わが貝塚の「市民の森」も例外ではなく、幼虫が発見された。すなわち10月20日にシルバーさん（高木ら）によ

り一匹の幼虫が遊学館にもたらされた。早速発見現場に行ってみると、キョウチクトウの枝先より3頭の終令幼虫と1頭の中令幼虫が見つかった。これら幼虫のいるところは新梢の葉がまとまって食べられ、木の根元に幼虫の糞が多数落ちているので、たやすく存在を知ることができる。この幼虫は大きな緑色（黄色型もあるそうである）のいもむしで、後胸の側面に1対の黒色で囲まれた青白色の眼状紋をもち、太い黄色の尾角をもつことで他種との識別はたやすい。終令幼虫は3～4日経つと体は黄色になり背面が黒っぽい色に変わり、摂食をやめ地上に下り、落葉の間に薄く糸を張り、やがてさなぎになった。このさなぎは休眠することなく、12月10～15日に次ぎつぎと羽化した。中令幼虫の方は成育が遅れ、11月に入ってさなぎになったが、気温が下がってきたためか、さなぎ体内の生理的な分化はなかなか進まず、12月30日にやっと体色が暗色になり羽化の間近いことを示した。このときはさなぎに触れると腹部をくると活発に動かして元気があった。しかし、翌31日の朝見ると体表にしわがよ

り全く動かなくなっていた。この死因は31日の朝の低温が原因であったものと思われる。当日は朝7時の室内温度が10℃であった。さなぎは窓際に置いてあったので、おそらくこれより2～3℃低い温度にであったものと思われる。ちなみに31日の気象庁発表の大阪の最低気温は4.2℃であった。

昆虫は変態時には温度変化に対し敏感になるので、本種の羽化に対し低温が悪影響を及ぼし、死に至らしめたということは十分考えられる。また先に羽化した個体も長く生きることとはできず、数日を経ずして羽化場所から落下して動かなくなっていた。本種にとって10℃以下の低温は羽化を妨げるばかりでなく、羽化した成虫も長くは生きられないものと思われる。

遊学館所蔵の標本は次のようである。
1♂, 6.?. '99 (11月5日芝生の中からさなぎ採集) ; 2♂, 10.?. '99 ; 2♂, 15.?. '99
(以上4頭は10月20日幼虫採集のもの)

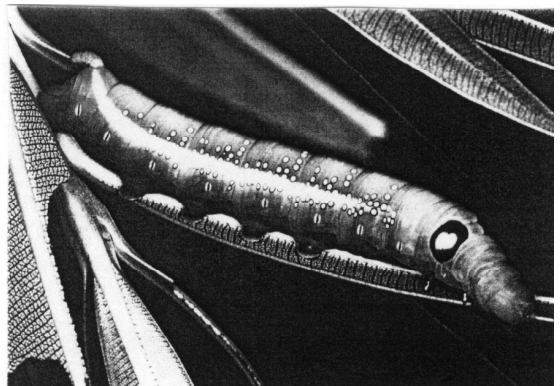
このスズメガの主な食草は、その名の示すようにキョウチクトウ科のキョウチクトウであるが、沖縄本島で同科の草本ニチニチソウをよく食べ、また同じ科のヤエサユウカ、ミフクラギの記録もある(木村, 1996)。

移動性昆虫は気流あるいは台風に乗って移動することが考えられる。この年は9月に二つの台風が日本に来ている。一つは9月15日の台風16号で、近畿、中部地方を横

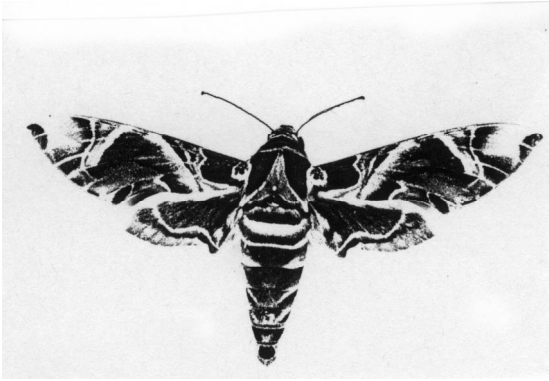
断した。次の9月24日の台風18号は九州に上陸、福岡から山口県を通り、日本海を北東に進んでいる。この蛾が台風に乗ばれて来たのであれば、その進路や幼虫の成育日数から逆算して、台風16号の方が可能性が高いように思われる。

引用文献

- 乾風 登, 1998. 和歌山県御坊市で発見された熱帯系の蛾, キョウチクトウスズメ. KINOKUNI (54):14-15.
- 金沢 至・松本吏樹郎, 2000. キョウチクトウスズメノ発生. Nature Study 46:2.
- 木村正明, 1996. 沖縄島における1993-1995年のキョウチクトウスズメの記録. 琉球の昆虫 16:11-12.
- 村瀬ますみ, 1998. 和歌山県北部でキョウチクトウスズメ発生. KINOKUNI (54):15-16.



終令幼虫



成虫 (♂)

本シリーズは1994年8月の自然遊学館
だよりNo. 3から続けてきたが、筆者の退職
により、一応今回で筆をおくことにした。
長年のご愛読ありがとうございました。

(黒子 浩)

「トンボの池」ヤゴ調査の結果

4月22日(土)に自然生態園「トンボの
池」のヤゴ調査が行われました。

今回は、自然生態園をつくる会のメンバー
と、トンボサミット実行委員会のメンバーが
合同で調査にあたりました。また当日飛び入
りで参加された近隣の方々も熱心に最後まで
つきあって下さいました。

調査は、池の中のアオミドロを取り除く清
掃作業も兼ねています。まず網でアオミドロ
をすくい上げ、その中に潜んでいるアオモン
イトトンボやシオカラトンボ、クロスジギン

ヤンマなどのヤゴを採集し、白いバットに移
して種の同定(種類の判定)を行いました。
今回は特に井上清さん(国際トンボ学会会
長)や松田勲さん(関西トンボ談話会)に、
トンボの説明を聞いたり、種の同定をお願い
できたりで、非常に有意義な調査であったと
思います。

調査で確認された種は合計11種です。なお
昨年確認されているウスバキトンボとコノシ
メトンボは今回確認されませんでした。

ギンヤンマ	32 (8.5%)
クロスジギンヤンマ	44 (11.7%)
マルタンヤンマ	2 (0.5%)
アオモンイトトンボ	169 (44.9%)
アオイトトンボ	15 (4.0%)
シオカラトンボ	40 (10.6%)
ショウジョウトンボ	20 (5.3%)
タイリクアカネ	51 (13.6%)
ノシメトンボ	1 (0.3%)
不 明	2 (0.5%)
合 計	376 (100.0%)

ヤゴ調査の前後からクロスジギンヤンマの
羽化が多く見られましたが、5月に入るとギ
ンヤンマやシオカラトンボ、アオモンイトト
ンボなども羽化しています。このような種と
羽化時期の関係を調べるためには、春から秋
にかけてヤゴ調査を毎月行う必要があります。

また大型のヤンマ類の羽化のためには、懸
垂できる場所と羽根が固くなるまでしばらく
羽根を広げる空間が必要ですが、羽根とアシ
の茎が触れて羽根を痛め、飛べずに死んでし
まった個体が見られました。春先のアシの抜
き取りによる羽化空間の確保や、小池の場合
は水から直接ヤゴがはい上がれる杭や石の必
要性が感じられました。



(ヤゴ調査に参加された方々)

岡田恵司・尚子・恵太郎・真太郎、松田勲、
宮武頼夫、井上清、高野ひとみ・朝子・誠一
郎、井上富子・由利子、岸谷達史朗・憲二郎、
沢田啓子・雄一・智子、畑中俊夫、鈴子晴久
・佐幸・達也・勝也、金井浩美、田野恵三・
理里、宇根崎博信・緑・萌恵・実緒、城野美
姫子、松崎真理、中野正治、山口進・フミ子、
黒田祥子、白木茂、塩崎兼人、橋本夏次、中
義雄、堀真治、増田久子、平峰厚正、二宮弘
子・龍祐、前山敬子、本庄元・桃子・ひろ子、
根川真弓・拓也、巨瀬駿、入口望、河添純子、
福田哲郎、西河嗣郎、東照晃、保田淑郎、上
久保文貴、白木江都子、山田浩二、湯浅幸子
(受付順)

(白木 茂)

近木っ子探検隊

箱谷川のトンボ探検 (2000. 4. 9)

朝からよく晴れた暖かい1日であった。午
前10時、蕎原口バス停に集合、参加者 20名、
ほとんどの人は車で来たが、バスでこども 2
名、タクシーで一家3名の参加があった。

バス停で集合。山田先生、平峰先生より今
日のコース、及び水生昆虫の採集方法などの
説明があった。特に清流にすむヤゴについて
は、成虫になるまでに何年にかかるものが多
い。きれいな水の流れの中で育っているもの
なので、持ち帰って家で育てることは不可能
に近い。採集しても観察したら必ず川へ返し
てやろう。

蕎原口バス停より箱谷川に沿って50mほど
進んだところが、第一ポイントである。まず
水を濁さないように静かに石を持ち上げ手で
水生昆虫などを探す。その後、網を使って底
の落ち葉や砂などを一緒にバットに入れ、そ
の中から水生昆虫などを探して採集する。



ここで採集したものは、つぎの8種であった。

- ・オニヤンマ
- ・コヤマトンボ
- ・モンカゲロウ
- ・フタスジモンカゲロウ
- ・フタツメカワゲラsp
- ・マダラカゲロウsp
- ・クロタニガワカゲロウ
- ・コバントビケラ

第1ポイントでの観察を終え、50mほど上流の第2ポイントへ向かう。第2ポイントは太平橋（おおへらはし）のすぐ上の水深20cmほどの所である。ここで採集できたものは、つぎの14種であった。

- ・ニシカワトンボ
- ・コシボソヤンマ
- ・コオニヤンマ
- ・ミヤマカワトンボ
- ・サナエトンボsp
- ・フタツメカワゲラsp
- ・ニホンヒメフナムシ
- ・サワガニ
- ・ミナミヌマエビ
- ・カワムツ
- ・カワヨシノボリ
- ・イモリ
- ・タゴガエル
- ・カワニナ

11時30分、第2ポイントでの採集を終了し、400mほど上流の第3ポイントへ向かう。その間で見られた植物（開花中のもの）は、つぎのようなものであった。

- ・ハコベ
- ・ウシハコベ
- ・オオイヌノフグリ
- ・タチイヌノフグリ
- ・ノアザミ
- ・ヒメオドリコソウ
- ・シロバナショウジョウバカマ
- ・タネツケバナ
- ・レンゲ
- ・ムラサキケマン
- ・シュンラン
- ・タチツボスミレ
- ・ニオイタチツボスミレ
- ・スズメノヤリ
- ・スズメノテッポウ
- ・コオニタビラコ
- ・ヤブタビラコ
- ・ダンコウバイ
- ・シキミ
- ・モチツツジ
- ・コパノミツバツツジ

12時 風をさけ、日当たりの良いたんぼのなかで弁当を食べる。 昼食後、今朝しかけておいたシェルビンをあげたが、ふたがはずれて全部逃げてしまった（カワムツらしきものが数匹入っていた）。

第4ポイントは、箱谷川にそって約300mほど上った所（府道貝・一牛滝線のすぐ下）であるが、朝しかけたシェルビンには魚は一匹も入っていなかった。水もきれいに澄んでおり水量もあるが、魚は棲んでいないようだ。 道路沿いの「箱谷の池」まで歩き、オツネントンボを探したが一匹も見つからなかった。 道路を引き返し、上流の「野井谷池」まで歩

く。池のなかではイモリ・クロスジギンヤンマのヤゴなどを採集した。土手の草むらの中にノウサギの糞などあり、池の側の道ばたで平峰先生は越冬性のトンボ「ホソミイトトンボ」を見つける。じっと細い木の枝にとまって、ほとんど動かない小型のトンボでなかなか見つけにくいトンボである。

途中、北田さん、黒田さん、天満さんの3人は、馬場まで行き、オツネントンボ・ミヤマオツネントンボ・ホソミイトトンボの3種の越冬性のトンボを採集してきた。

午後2時。府道貝・一牛滝線まで引き返し解散。朝集合した蕎原口のバス停まで歩き、2時30分車に分乗して帰る。解散後、有志の者でもう一度「箱谷の池」まで行きオツネントンボ・ホソミオツネントンボを見つける。



(上久保文貴)

2000年春のトンボ

越冬中のトンボを探しましたが、残念ながら見つからず。春になってから次々にトンボをみることができました。

4月4日：馬場蓮池

オツネントンボ、ホソミオツネントンボ
(すでに繁殖している)

4月9日：馬場蓮池

オツネントンボ、ホソミオツネントンボ

4月9日：蕎原野井谷池

ホソミイトトンボ (冬の色)

4月16日：森迫辺池

トンボはいない

4月21日：千石荘

ホソミイトトンボ

4月23日：馬場蓮池周辺

シオヤトンボ、オグマサナエ

4月24日：馬場蓮池

オグマサナエ羽化殻2、オグマサナエ (雌雄)、シオカラトンボ

4月25日：馬場奥出池

ホソミオツネントンボ、オツネントンボ、
ホソミイトトンボ、オグマサナエ、
ニシカワトンボ

4月27日：とんぼの池

クロスジギンヤンマ

4月29日：葛城山

トンボいない

4月30日：箱谷

トンボいない

5月1日：馬場蓮池

ホソミオツネントンボ、ホソミイトトンボ、
オグマサナエ、ニシカワトンボ

5月2日：海岸寺山

シオカラトンボペア

5月3日：森

トンボいない

5月5日：葛城山

ニシカワトンボ、ムカシトンボ

5月7日：千石荘

ハラビロトンボ、シオカラトンボ、

5月8日：ハラビロトンボ、シオカラトンボ、

ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、

アオモンイトトンボ

5月9日：馬場蓮池

ホソミイトトンボ、ホソミオツネントンボ、
ヤマサナエ、羽化殻、クロスジギンヤンマ、

ニシカワトンボ、シオカラトンボ、

オグマサナエ

5月10日：とんぼの池

ハラビロトンボオス、アオモンイトトンボ

5月11日：馬場奥出池

ホソミオツネントンボ、ホソミイトトンボ、
シオヤトンボ、シオカラトンボ、

ニシカワトンボ、オグマサナエ、

ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ

(黒田祥子)

近木っ子探検隊「化石を掘る」

2000年1月22日(土)

場所：貝塚市蕎原箱谷

講師：和泉鉱物研究会 高田雅彦 氏

参加者42名、スタッフ6名

採集場所の「箱谷」は、モササウルス（海生爬虫類）や大型アンモナイト（パキディスカス）、古代ザメのラブカの歯の化石などが産出するなど和泉層群での発見が相次いでいるところです。参加者は期待に胸ふくらませて、中生代白亜紀後期の泥岩層にハンマーを入れていきました。参加した子供たちの感想を以下に載せます。

南小学校3年 富田千晴

化石をほる場所についた時、山だから、草とか木の葉っぱの化石が出てくるのかな、と思いました。

たがねで石をわって、化石を見つけました。出てきた時、「やった。」と思いました。でも、なかなかきれいな化石がありませんでした。きれいな化石をさがすために、石をたくさんわって化石をさがしました。6800万年前のナノナビスと言う、二まい貝のがでてきました。

出てきた貝の化石をブラシでみがきました。6800万年前の化石がとれてうれしかったです。

南幼稚園 岡田真太郎

今日はおもしろかったよ。

だっていっぱい化石がいっぱいとれたもん！

南小学校 5 年 岡田恵太郎

今日、蕎原の箱谷というところで化石採集をした。かなづちとたがねという道具で岩をわってさがした。「サンドパイプ」という、生き物の巣の化石が多かった。昼までいっしょうけんめいさがしたのに、貝の化石がなかった。

昼食を食べてからやると、やっと二枚貝の化石が 2 つぐらい出た。ワイヤブラシと五すんクギで形をととのえた。

化石とりは初めてなので取れるか心配だったけど、取れたのでうれしかった。また行きたいです。

二色小学校 4 年 斎藤円華

化石発くつは私は 2 回目だ。だから今度は大発見をするぞと思って参加した。今回は体長 30 メートルのモササウルスの化石などを発見した有名な先生も参加してくれた。私はむねが高なった。

「小さな化石も世界で 1 こしかない物だから大切に。」と言う先生の言葉が心強かった。

小さな二枚貝の完全な形の化石を見つけた。先生に見せたら、「今回きたかいがあったね」と、いっしょに喜んでくれた。アンモナイトの一部の化石や植物の化石なども見つけた。つぎは、この 2 回の経験を生かして、もっとしっかりしたハンマーやたがねをそろえて、サメの歯をさがしたい。

和泉葛城山登山道の植物

4 月 29 日「みどりの日」、恒例の葛城山地美化登山に、自然遊学館からは、保田、上久保、山田、湯浅の 4 名が参加した。蕎原集落より急な坂道を登り、岸和田市との境界線沿いを尾根づたいに登る B コースから登り、下りは宿の谷から本谷を通り、東手川の「春日橋」に帰る A コースである。最近のハイカーはマナーがよく、途中の道ではほとんどゴミは見かけなかった。天候にも恵まれ、よいハイキング日よりであった。

コース途中の道ばたで見かけた植物のうち「大阪府植物誌」（桑島正二著）に大阪府下での参状が「希」または「やや希」とされているものは、つぎのようなものであった。

《希》

- ・テイショウソウ（きく科）
- ・マネキグサ（しそ科）
- ・ウスバヒョウタンボク（すいかずら科）
- ・ミヤマウコギ（うこぎ科）
- ・コショウノキ（じんちょうげ科）
- ・エイザンスミレ（すみれ科）
- ・タチネコノメソウ（ゆきのした科）
- ・ツルシキミ（みかん科）
- ・マルバコンロンソウ（あぶらな科）
- ・ユリワサビ（あぶらな科）
- ・トウゴクサバノオ（きんぼうげ科）
- ・ユキザサ（ゆり科）

《やや希》

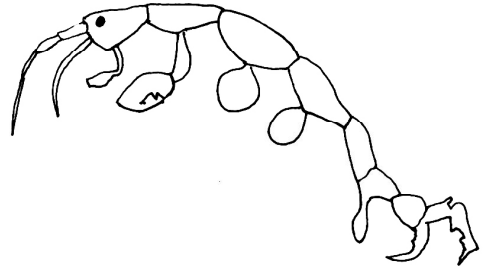
- ・モミジガサ（きく科）
- ・タニギキョウ（ききょう科）
- ・ツルニンジン（ききょう科）

- ・ミカエリソウ（しそ科）
- ・イチリンソウ（きんぼうげ科）
- ・ニリンソウ（きんぼうげ科）
- ・アワブキ（あわぶき科）
- ・ミヤマハコベ（なでしこ科）
- ・ヒメレンゲ（べんけいそう科）
- ・ツルカノコソウ（おみなえし科）
- ・ジロボウエンゴサク（けし科）
- ・ヒトリシズカ（せんりょう科）
- ・フタリシズカ（せんりょう科）

（上久保文貴）

ち込まれたのは、甲殻類のワレカラの仲間です。トゲワレカラとマルエラワレカラでした。陸の昆虫と海の中の甲殻類で姿や動きの似た生き物がいるのは、おもしろいですね。

（K. Y）



マルエラワレカラ

【身近な生き物トピックス】

・ツバメの巣

自然遊学館の建物入口近くに今年もツバメが営巣しています。昨年作った巣は、ほとんど潰れてしまっていたのですが、見事に修復して6個の卵を抱えています（5月11日確認）。また、近くにあるシェルシアターのトイレにも巣があり、3年前には繁殖が確認されましたが昨年、一昨年と戻ってきませんでした。しかし今年はツバメが出入りしています。3年前のツバメと同じツバメかどうか分かりませんが、...

（K. Y）

・ワレカラ

水温む季節となり、海辺に立つ自然遊学館には、一般の方からカニ類、イトマキヒトデヒトデ、ホンヤドカリなどがよく持ち込まれるようになりました。「海藻にナナフシみたいな生き物がいました。なんですか？」と持

・ニホンザル

犬鳴山温泉街から和歌山に抜ける道（府道泉佐野内田線）で児島格さんがニホンザルを一匹目撃しました（5月7日午前9時半）。立派で毛並みが良かったそうです。オスは群れから離れ遠く放浪することが知られていますが、いったいこのお猿さんはどこからやって来たのでしょうか。

（K. Y）

・白いサワガニ

徳島県海部郡大島にて5月14日、楠井善久さんの採集してきた3匹のサワガニは、泉州地域でみられる朱色をしておらず、白っぽい色をした個体です。この島で見つかるサワガニはどれも、こんな色だったそうです。一生を淡水で暮らすサワガニにとって、このような小さな島では、四国とは孤立した地域個体群（同一の種の集団）になっているのでしょうか。現在、館のカニ展示コーナーにて飼育中です。

（K. Y）

・ヤドリバエ

木島小学校3年生、井上誠君は、自宅のユズの木につくアゲハチョウの幼虫が蛹から成虫になるまで、毎年、育てているそうです。今年も飼育した幼虫がつぎつぎと羽化し、成虫になりました。しかし、そのうちの一匹がなぜか蛹のままで、死んでしまいました。蛹の中はからっぽで、中には何か黒いかたまりのようなものが、入っていました。

遠足の時、自然遊学館へ持ってきてくれましたので、（4月27日）ケースに入れて飼育してみると、黒いからだのヤドリバエが飛び出してきました。（4月30日）アゲハチョウの幼虫にヤドリバエが卵を生みつけ、卵からかえったヤドリバエの幼虫は、アゲハチョウのからだの中で、アゲハチョウのからだを食べて成長したようです。

（F．U）

自然遊学館だより 2000春号（No. 19）

発行日 2000. 5. 22

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

貝塚市二色3丁目26-1

TEL 0724(31)8457
